# 青札の一字決まり

かささぎの 渡せる橋に おく霜の
白きをみれば 夜ぞふけにける

みちのくの しのぶもぢずり 誰ゆゑに
みだれそめにし われならなくに

このたびは ぬさもとりあへず 手向山
紅葉の錦 神のまにまに

めぐりあひて 見しやそれとも わかぬ間に
雲がくれにし 夜半の月かな

いにしへの 奈良の都の 八重桜
けふ九重に にほひぬるかな

よをこめて 鳥のそらねは はかるとも
よに逢坂の 関はゆるさじ

さびしさに 宿を立ち出でて ながむれば
いづこも同じ 秋の夕暮れ

うかりける 人を初瀬の 山おろしよ
はしかれとは 祈らぬものを

ちぎりおきし させもが露を 命にて
あはれ今年の 秋もいぬめり

わたの原 漕ぎ出でて見れば ひさかたの
くもゐにまがふ 沖つ白波

ももしきや 古き軒端の しのぶにも
なほあまりある 昔なりけり

《その他の青札の句》

あしびきの 山鳥の尾の しだり尾の ながながし夜を ひとりかも寝む
奥山に 紅葉踏みわけ 鳴く鹿の 声きく時ぞ 秋は悲しき
天つ風 雲の通ひ路 吹き閉ぢよ をとめの姿 しばしとどめむ
有明の つれなく見えし 別れより あかつきばかり 憂きものはなし
朝ぼらけ 有明の月と 見るまでに 吉野の里に 降れる白雪
君がため 惜しからざりし 命さへ 長くもがなと 思ひけるかな
嵐吹く み室の山の もみぢ葉は 竜田の川の 錦なりけり
思ひわび さても命は あるものを 憂きにたへぬは 涙なりけり
きりぎりす 鳴くや霜夜の さむしろに 衣かたしき ひとりかも寝む